

文部科学省初等中等教育局視学官、  
兼任文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、  
国立教育政策研究所研究開発部教育課程研究センター教育課程調査官

杉田 洋



杉田 洋

すぎた ひろし\*埼玉県生まれ。日本大学法学部卒業。  
埼玉県浦和市内小学校教諭、浦和市教育委員会指導主事、さいたま市教育委員会主任指導主事、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官・国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官などを経て、2013年4月から文部科学省初等中等教育局視学官。  
●著書に、「心を育て、つなぐ特別活動」(文溪堂)、『よりよい人間関係を築く特別活動』(図書文化)、『特別活動の教育技術』(小学館) など多数。

# これからの 学校教育と特別活動

人間教育研究協議会代表、学校法人聖ウルスラ学院理事長、  
学校法人松徳学院理事長

梶田 叡一



梶田 叡一

かじた えいいち\*松江市生まれ、米子市で育つ。京都大学文学部哲学科(心理学専攻)卒業。文学博士。国立教育研究所主任研究官、大阪大学教授、京都大学教授、京都ノートルダム女子大学学長、兵庫教育大学学長などを歴任。この間、中央教育審議会副会長、教育課程部会長なども務める。  
●著書に、「和魂ルネッサンス」(あすとろ出版)、『新しい学習指導要領の理念と課題』(図書文化)、『教育評価』(有斐閣)、『基礎・基本の人間教育を』、『教師・学校・実践研究』『意識としての自己』(金子書房) など多数。

## 改訂のポイントと 学校での実践の状況

**梶田** 新しい学習指導要領がようやく定着してきたところだと思えます。初めに、最近の全国の特別活動の取り組み状況についてお話しください。

**杉田** 今度の改訂は、社会参画の態度や自治的能力の育成に重点をおくとともに、新たに「人間関係」を目標に加えました。

このことは、はじめ、不登校の問題においても、また、学力向上の土壌づくりとしても人間関係が大事であり、特別活動の果たす役割が大きいということを意味します。これらの学習指導要領の改訂は、多くの学校に好意的に受けとめてもらいました。

**梶田** 具体的にはどんな取り組みが進められていますか。

**杉田** 違いや多様性を超えて合意形成を図るための話し合い活動の研究に取り組み学校が全国的に増えてきました。また、異年齢交流活動による縦の人間関係を築く活動も盛んに行われています。

はじめの問題も先生の側が単にしつけや管理だけで封じ込めるのではなく、児童会、生徒会自らが学校を浄化していくような活動もいっそう重視されるようになってきました。

や生徒会、学級活動やクラブ活動、儀式的行事などにしても、全て子どもたちに市民性の土台を培うというところで、集团的、社会的な面を大事にしなければなりません。

### 特別活動は、 日本型教育の大きな財産

**梶田** 日本の学校教育では、30〜40年前は特別活動が大事にされていましたが、その意義がだんだん薄れてきていました。ようやくうまくいくようになってきたわけですね。

特別活動はもともとサードカリキュラム、第三のカリキュラムということで、教科の学習、道徳教育、そして三番目の教育領域、市民性の基盤を養うということで行われてきました。だから、児童会

生活や学習をつくっていることを高く評価しています。つまり、学級経営の充実を基盤に据えて授業改善が図れている点を称賛しているのです。

**梶田** 特別活動の役割を再認識させられますね。学級経営は、まさに日本の教育界のすばらしい財産です。アメリカやヨーロッパは、学級集団という考え方があまりありません。結局、「先生と一人ひとりの子ども」になるので、先生も含んで学級を一つの社会として育てていくという学級経営は、日本的な特質です。世界に輸出したい知恵ですね。

**杉田** そうですね。そこで、東京大学の恒吉僚子教授にお願いして特別活動を世界に発信するための英語版ホームページ「TOKKATSU」<sup>※1</sup>をつくってもらっています。日本は必ずしも欧米を追いだけでなく、日本のよいところをきちんとアピールしていくことも大事です。このことを日本国内に啓発すべきと考える先生方が、私を応援するホームページ「特別活動 希望の会」<sup>※2</sup>も開設してくれています。

**梶田** 一時期、「教育はフィンランドだ」と一部の人が大騒ぎしていましたが、私が兵庫教育大学にいた頃、神戸で毎年国際シンポジウムを行いました。その折、フィンランドの講師の方々は「若い時は日本の教育を勉強しないとけない」ということで、日本の授業づくりや学級づくりについて随分、勉強したものです」と、話しておられました。日本の教育は、フィンランドでも以前から高く評価されていたのです。

**杉田** 日本の教育のよさが見直されてしかるべきですね。

**梶田** 日本の教育のよさが忘れられていたのです。その一つが授業研究です。教師集団という考え方があつたわけですから、みんなで授業研究して、切磋琢磨<sup>せつさく</sup>したものです。もう一つが学級づくりです。学級が学校の中で子どもたちの居場所にならなくてはなりません。これは大事なことです。

**杉田** 特別活動は手づくりのカリキュラムで、現場の先生の知恵で今の実体的な指導法や内容をつくってきました。はじめを生ま

※1 ミルズ大学教授 ハーバード大学卒業、スタンフォード大学大学院心理学博士課程修了。日米の教育現場の調査・研究を30年間にわたって継続している。初等教育や児童の発達をテーマとした著作物は40以上に上る。  
※2 TOKKATSU <http://www.p.u-tokyo.ac.jp/~tsunelab/tokkatsu/>  
※3 特別活動 希望の会 <http://kibounokai.net/>

ない風土をどう生み出すか、PISAの報告の一つに、雰囲気の高い学級、モラルの高い学級は例外なく成績が高かったとされていますが、そういう学級をどうつくるかと試行錯誤を繰り返してきたのです。先生側だけでなく子どもにも参画させていくことを大事にしていく必要があります。

**梶田** 自治という、自分たちで自分たちのことを決めて動かし、よく考え方ですね。もちろん、先生が適切な場をつくり、子どもたちが話し合い、まとめていくときでも、偏った方向にいく、あるいは考え落ちがあるときは先生が助言しなくてはなりません。そうすることによって、本当の自治の力がついていくのです。それを日本の先生はずっとやってきま



するからです。先生の期待する動きが子どもの側から出てくるように仕向けることです。口で言うだけではどうにもなりません。センスです。優れた先生の動きを見て学ぶことです。

**杉田** 特別活動を理解できない先生は、一つは、させる指導に終始している先生です。子どもの「〇〇したい」という意欲を引き出し、子ども自身で実現できるようにする指導観が乏しいのです。もう一つは、子どもを信用することができない先生です。期待もせず、信用もすることができなければ、先生が自分でやってしまっ、教え込んだほうが早い、となってしまうのです。

**梶田** 子どもの自主性が育たないのですね。

**杉田** 深刻なのは、「望ましい集団活動や学級会の指導」を十分に理解できていない先生がその指導をしていることです。個が否定される集団活動になっていたり、先生が口を出して先生のための話合いになっていたりする場合もあります。先生の要求型の学級会が増えているのです。

このすばらしい特別活動の指導法を伝えたい

**杉田** 最近若い先生が増えて、特別活動には教科書がありませんので、指導法など教師力の連鎖がはたらかず、残念なことになってやうやう学級会などの特別活動の指導をしたらよいか、どうやってそれを学級経営に生かしたらよいか分からない先生が増えてしまいました。そこで、国として18年ぶりに資料をつくり、全国の学校に配布しました。

『楽しく豊かな学級・学校生活を つくる特別活動(小学校編)』です。指導方法などをビジュアルにまとめています。

**梶田** なかなか斬新ですね。

**杉田** ただ配るだけでなく、指導主事会を通して、教育委員会が積極的に活用し工夫するようにとお願いしています。日本型教育としての特別活動のよさや大切さがわかる先生をしっかりと育てていかなければいけないとい

**梶田** 先生からの伝達や指示だけでは困りますね。

**杉田** 例えば、自転車に乗る練習をさせるのに、ずっと後ろを押さえていることと同じです。そこが非常にどにかしいのです。ときには子どもが転ぶことがあっても、それを見守って、社会で生きていけるようにしなければならぬのです。

特別活動というきわめてすばらしいカリキュラムがあるけれど、乗りこなせる先生が少ないことが悩ましいところですね。

**梶田** ここ20年ぐらい、子どもに本当の意味での指導をしない風潮が教育界にはびこりました。そのことで、先輩の先生たちの優れたノウハウが、若手、中堅の先生に伝わらないままになっているようです。大急ぎで何とかしないと

義務教育は人間をつくること

**杉田** 今、ある意味で学力に傾斜していますが、義務教育が人間の骨格づくりをする場所、人

うことです。

**梶田** ゆとり教育では、ゆとりと放任を取り違え、子どもに好きなことを好きなときに好きなようにやらせたことで、子どもたちの市民性の基礎といわれる自治能力までなくなってしまうたのです。

**杉田** 全くそのとおりだと思います。子どもに任せるといふことは、先生に相当な指導力がなければいけないということです。先生が舞台から降りてしまっ、子どもが好きなようにやるのが横行したので、本当の自治が育たなくなりました。

間をつくるころなのだということころを、もっとしっかり打ち出していけばいいと思います。

**梶田** それも学力なのです。例えば、共生の能力です。違うタイプの人、違う考えの人、違う価値観をもっている人とも上手につき合いながら一つ何かをつくり上げていく力を最終的につけなければいけない。それが、学力が目指すことの基本です。

人間は一人では生きていきません。でも、いろんな人がいます。そこで自分が参画しながら、いろんな人と一緒に何かをつくり上げていく。そのトレーニングは小



**梶田** 今、杉田先生が力を入れておられる特別活動を小・中・高で強力にやっついていかないと、よい先生も育つていかないのではないのでしょうか。

**杉田** 大学で、特別活動という講座を担当していますが、座学では無理です。よりよい学級をつくることをどう教えるのか、それには現場に出てもらうのがいちばんよい方法ではないかと思っています。大学の授業改善も必要になると思います。

**梶田** 教員養成においては、実習が大切です。教育の勝負は目の前の子どもたちに、どう対応

学校の学級活動や児童会活動、部活動などにあるわけですから、そこで身につけていってほしいものです。

**杉田** よい集団の遍歴を通してよい人間が育つという発想をもっと少し取り入れていく必要があると思います。しかし、子ども集団はある意味で弱肉強食とも言え、放っておいたらすぐにいじめが起きます。だから、大人が一人ひとりに寄り添って、子どもたち自身がよい集団をつくっていく力を身につけられるように特別活動をもっと充実させる必要があります。



**梶田** 子どもに任せっきりが、いかにダメなことか、わからないといけないのです。

**特別活動として  
果たすべき三つの切り口**

**杉田** 今、学級がうまくつくれるかどうか問題なのです。教育委員会も学校も教科指導は非常に熱心ですが、学級経営は学級担任任せになっていることが心配される点です。特別活動のもっている力や役割をもう一度認識してもらって、教員養成や教員研修をしてほしいのです。

**梶田** そういうことからいうと、デジタルな指導資料をつくっていただいたし、各都道府県、市町村教育委員会などに趣旨徹底をしていただいていると思いますが、ぜひ各市町村で、学級経営がうまくいっているモデル校を指定して、みんなが学ぶ動きを強めてほしいと思います。

**杉田** そこに特別活動を介在させることによって、カリキュラムを通して学級担任の持ち味を生かしながらも組織で学級経営を進めたいですね。

**杉田** 学級会の指導が適切に行えるようにならないといけないと思います。みんなが自分の思いを述べて、「みんな違って、みんないい」という面を大事にしながらも折り合いをつけて、一つの結論を導き出し、それを実現していく経験をもっとさせないといけないと思います。その指導を思いのままでできない問題があって、18年ぶりに国として資料作成と配布につながったわけです。

**今、念頭に  
おいてもらいたいこと**

**梶田** 最後に小学校の先生向けに、特別活動で特にこういうことを念頭においてがんばってほしい、工夫してほしいとお考えのことを挙げてください。

**杉田** 今、言語活動を充実しましょう、言語能力を育てましょうと言われています。その中で、特に学習指導要領において、今回初めて小・中・高をそろえて「よりよい集団をつくるために集団として意見をまとめるなどの話合

めていく視点をもちつことも大事です。

その切り口として、「いじめの未然防止」と「学力向上」と「自己有用感」という3本を立てて特別活動としての役割を果たしていこうと考えています。これが、最終的には市民性の育成につながると思っています。

**梶田** 自己有用感、私もがんばればできるという気持ちをみんなながらもちながら、「〇〇君も、〇〇ちゃんも同じだよ。みんなががんばって手をつないでいくことができるね」というところにかないといけないのです。

**杉田** 道徳教育にも十分貢献したいと思っています。自助、互助の心を育てることに關しては日本の教育はかなりしつかりやってきました。国際基準で評価することができないので、データを示して自慢できないのですが、自助、互助に關しては、日本の教育は世界に冠たるものがあると思っています。その点をもっとアピールしたいものです。

道徳の時間は、資料を使って例えば「幸せ」とは何かについて考える活動の充実について示しました。自治の基本は、児童会、学級会、生徒会だと思っていますが、特に小学校における学級会の指導にもう少し力を入れてもらいたいのです。

学級をどうしたらよいかということについては、まず「私は」を主語としてものを言うことです。ものを言わないということには参画していないということ。次は、「私とあなた」と意見の違いをわかり合おうです。そのうえで、最後には、その違いや多様性を超えて、「私たちは」を主語にして、我慢するところは我慢して、折り合うところは折り合せて、一つの方向を定めてみんなで見現していくというプロセスをしっかり指導してほしいですね。

**梶田** 特別活動の原点に戻って、これから全国をご指導いただき、「我々の世界を生きる力」と「我々の世界を生きる力」がきちんと育っていくよう願っています。

特別活動の大切さや進め方、示唆に富むお話をいただき、ありがとうございました。(編集部)

えますが、特別活動の場合は、幸せになるためにはどうしたらよいかと学級や学校の問題を話し合っ解決します。実際に取り組んだあとに、「幸せ」とはどういうことだろうかと考えるのです。両者の役割と関連をぜひ充実してほしいと思います。

**市民性の基盤を養う**

**梶田** 市民性の基盤を養うためには、みんな違うよねというところを土台にして手を結ぶことが大事です。日本の伝統には、古くからあったことです。

聖徳太子は、最後に和を実現するためには自分だけが正しいと思っはいけないと言っています。「私が優秀なわけではない。他の人が愚かなわけでもない。ともにただの人間だということから出発しよう」(※4)というのです。互いの違いを乗り越えて最後は手をつながないといけない。これが拡散と収束の日本的な原型だと思っています。「和して同ぜず」。これが本当の和なのです。こうし

た発想が聖徳太子の時代から連綿と続いてきているのです。このことをもう一度、日本の教育界が見直すべきです。先輩が学校でやってきたことでもあるのですから。

**杉田** 学校では、理解に時間がかかる子どもとよくできる子どもが一緒に学ぶことに、意味があるとあります。すらすらと理解できる子どもができない子をバカにするようであれば、およそ社会に出て役に立たないのです。ですから、できる子どもできない子ども一緒に学び、全員参加の授業を前提に、全てを習熟度別にしないというよさを再認識したいと思っています。個にばかり視点を当てていたら、自分勝手やうぬぼれと自尊心とは紙一重であり、健全な自尊心がどういふものかわからなくなると思います。

**梶田** 自信をもたないといけないのですが、「我のみ貴し」では困ります。

**杉田** そのためには、個性教育と共生教育は相反するものではないと考えるべきです。

**梶田** その視点は非常に大事で

**杉田先生著書のご紹介**

**心を育て、つなぐ 特別活動**

～道徳実践へのアプローチ～

編著 杉田 洋

文部科学省視学官 国立教育政策研究所教育課程調査官

すぐに指導に生かせる実践例を豊富に掲載!

特別活動における「心のノート」活用法も紹介!

特別活動と道徳教育が一度に充実します。

判型/B5判 ● ページ数/128頁 ● 定価1,800円(税込)

**もっと先生も子どもも、学校を楽しもう!**

こんな実践事例を掲載!!

Q 温かな人間関係を育てたい…

A 仲よしゲーム集会をしよう! 学級活動(1)より

Q よりよい食習慣を身に付けさせたい…

A グリーンパワーを取り入れよう! 学級活動(2)より

Q 思いやりの心を育てたい…

A 「1年生を大切にしよう月間」に取り組もう! 児童会活動より

※4 「我必ずしも聖(せい)に非ず。彼必ずしも愚(ぐ)に非ず。共に是れ凡夫(ばんぶ)であるのみ」十七条憲法第十条